



農村歌舞伎とヤマロク醤油をヒントにした

唯一無二の職人研修制度

『茅の白川郷、藁の小豆島』

伝統文化の後継者問題はいまや日本全国で起こっています。この「後継者問題」は「1. 修行に何年もかかる」「2, 仕事で各地を転々としなければならない」という2つの問題が大きなボトルネックです。そこで、小豆島を「実践的な修行の地」にしてしまおうというのが、私達のアイデアです。小豆島の各地にある空き家を藁葺屋根の実践的な練習場にすることで、まるで白川郷のように小豆島を原風景化すると同時に職人を育成するのが、我々の狙いです。



プロジェクトメンバー

芝浦工業大学デザイン工学部2年 芝浦工業大学デザイン工学部2年 芝浦工業大学デザイン工学部2年

香川大学工学部3年

大霜 創 菱沼 正寛 小澤 佑花 川井 咲菜

ポイント

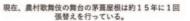
人の定住ではなく技術の定住を狙う

何故、小豆島でこの研修制度が必要か?と言えば「農村歌舞伎」があるからです。農村歌舞伎は小豆島の名物であると同時に、一定期間ごとに屋根の葺き替えが必要です。そして、その費用は数千万円と極めて高いのがネックです。私達はこの「数千万円」をただの葺き替えに使うのではなく、「人を育てるのに使

いながら、ついでに葺き替えをしてもらおう」と考えました。

この制度は「小豆島で藁葺き職人の修行をする場合は、滞在費・生活費・材料費を補助する」もので、その代わりに「1. 小豆島の茅葺屋根の葺き替えを無償で行わなければならない」「2. 小豆島滞在中は、新たに来る後輩の指導をしなければな

らない」というルールが課せられます。ポイントは人の定住ではなく、技術の定住を狙うところにあります。 技術が定住するということは、人は変われども、一定の人が常にそこにいるからです。つまり、個人にこだわらないことがミソです。



自分たちで行っていたものの後継者不足に悩んでいた。 しかし、外部に依頼した場合、数千万円程度かかって しまうため継承者を求めている。





3-4 研修中は基本生活費用を 小豆島側が負担する

茅葺

ススキやチガヤなどを指す「茅」の茎を材料とする

ッショウ 藁葺

表やቸの「藁」を材料とする

「地域の課題へ直に向き合う」という価値

今回の対流事業では着いて早々に台風が直撃しましたが、島の特産物を食べたり、稲刈り体験をしたり、地引き網をして楽しみました。楽しみつつも一方で、島の方の話や自身の体験から、島の課題も感じました。

授業ではカタチのあるモノをデザ インする課題が多い中、カタチのな

いサービスのような側面から「小豆島をデザインする」という今回のテーマにグループみんなで苦しみました。最終的には、ヤマロク醤油さんの「自分たちが新しく職人になり、受け継いでいく」という発想を基に、棚田をもつ小豆島ということも踏まえ、藁葺き屋根職人の育成という案で特別賞をいただきました。

都会では考えることのなかった地域 の課題に向き合い、伝統に触れ、た くさん体験することができました。 考えもしなかったことを考えるきっ かけを与えてくれる、そこが対流事 業の良さの一つだと思います。

(大霜 創)

21